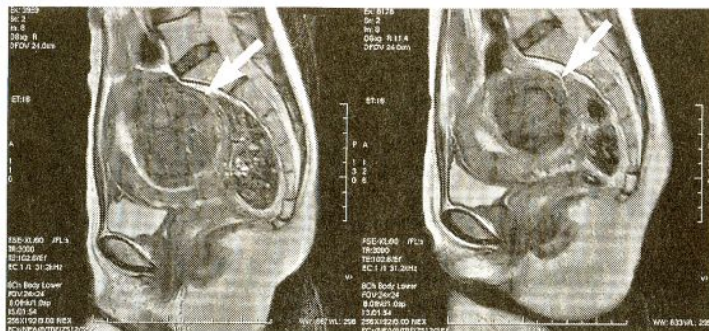




集束超音波治療を受けた46歳の女性の磁気共鳴画像。治療直後には大きかった子宮筋腫（左の矢印）が、6カ月後②には周囲の組織に吸収されて縮小した（森田・板橋中央総合病院産婦人科部長提供）

子宮筋腫 新たな選択肢

切らずに超音波で治療

画像装置で病巣の位置を正確に特定し、体を傷つけずに超音波で狙い撃ち。こんな治療法が子宮筋腫に悩む女性の新たな選択肢として注目されている。誰もが治療条件に合うわけではなく、再発の可能性もあるが、外科手術を受けず日帰りで治療できる体への優しさがメリットだ。（吉村敬介Ⅱ共同）

子宮筋腫は女性ホルモンによって成長する良性腫瘍。35歳以上の日本人女性の4人に1人が持つと推計される。仕事や子育てに多忙な年代が大半を占め、過多月経から重い貧血が起きて生活に支障が出る人もいる。

閉経して女性ホルモンの分泌が低下すると腫瘍は小さくなる。それまでの間、手術を受けずに済む選択肢が、医師や患者から求められていた。

厚労省が承認

新しい治療に使うのは「MRガイド下集束超音波治療器（MRgFUS）」という大型装置。体

MRで「日帰り」メリ

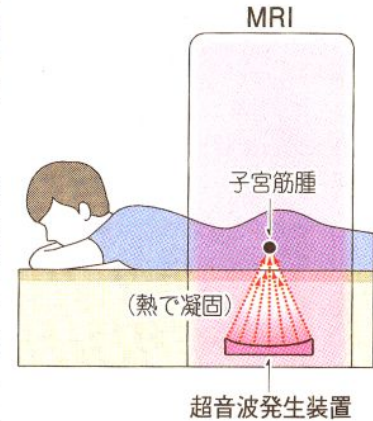
治療は子宮全摘に加え、腫瘍だけを取る核出術、カテーテル（細い管）を使い血流を止め、腫瘍を縮小させる動脈塞栓術などが主流だが、3〜10日の入院が必要で二の足を踏む人も多い。

女性にとって子宮全摘は大きな決断。通常は卵巣を残すためホルモンの機能は正常だが、森田部長は「子宮を失ったことによる喪失感」を熱く語る。熱で凝固した腫瘍は、時間とともに周囲の組織に吸収される。似た原理

の体内をMRIで3方向から撮影し医師が患部を特定。体外から照射した超音波を一点に集めて65〜85度まで加熱する。腫瘍の大きさに応じ場所を変え、数時間かけてこれを何回も繰り返す。

熱で凝固した腫瘍は、時間とともに周囲の組織に吸収される。似た原理

超音波による 子宮筋腫治療の仕組み



の機器はあるが、MRIで正確な位置や温度を管理できるのが強みだ。治療後、通常は翌日から普段の生活に戻る。

同病院は2004年から約190人を治療。森田部長によると、24〜51歳の90人を調べると、腫瘍が1年後に平均67%の大きさまで縮小してい

ソット

た。約8割は過多月経や腹部の張った感じがかなり改善したと答えた。

対象外の人

ただ6人は症状が再発。凝固した周囲に腫瘍の一部が残るためとみられ、後日、子宮全摘手術などを受けた。

「再発をできるだけ避けるため、治療対象にふさわしい患者を適切に選ぶことが重要」と森田部長。「40代半ば以上の女性なら、数年後に再発してもホルモン療法を併用し、閉経まで手術なしで済ませることができるのでは」とみる。

治療条件に合わない人もいる。腫瘍の数や大きさが一定以上だと、治療

が長時間に及ぶため受けることができない。また腫瘍の位置が照射装置から見て腸管の裏側だったり、腹部に手術痕があったりする人では、超音波が正しく作用しない。妊娠を望む女性も現時点では適用外だが、治療後の出産例は国内外に複数あるという。

もう一つの課題は治療費。保険適用されないため全額が自己負担となる。外科手術の20万〜30万円に比べ、50万〜60万円とかなり高額だ。

森田部長は「できれば手術は避けたい、という『アラフォー』世代の独身女性からの希望も増えた。ライフスタイルに合わせた最適な治療法を探るのに役立つのでは」と話す。

患者との 会話が

頭が痛い、腹痛がする、熱がある……。病気になったかもしれないと感じたときに、みなさんはどうないますか。取りあえず様子を見たり、市販薬を飲むという方もいらっしゃる